

ご 挨 拶

平成20年6月、独立行政法人国立女性教育会館は、男女共同参画社会の形成などに顕著な業績を残した女性や女性教育・女性施策等に関する過去の記録の収集・整理・保存・提供を行う女性アーカイブセンターを開設いたしました。

本展は、女性アーカイブセンター開設を記念して開催する初めての企画展示です。「高等教育」という分野でチャレンジした女性たち、すなわち、女性のための高等教育機関の創設者、下田歌子（実践女子大学）、津田梅子（津田塾大学）、吉岡彌生（東京女子医科大学）、二階堂トクヨ（日本女子体育大学）、香川綾（女子栄養大学）の5人に焦点を当て、その人物像や、女性の高等教育の黎明期の状況をご紹介します。

明治時代中葉、女性の高等教育については、無用論や時期尚早論が大勢を占めていました。その中で、彼女たちは、幾多の困難を乗り越え、自らが理想とする女性の高等教育機関を立ち上げていきます。それは、専門教育や職業教育を通して女性たちの自活と自立を促すものでした。強い意志と努力で自身の生きる道を切り拓き、多くの女性に活躍の場をもたらした彼女たちのチャレンジは、現代に生きる私たちにも多くのことを教えてくれるでしょう。

女性アーカイブセンター企画展示は、今後も、さまざまな分野で「チャレンジした女性たち」をシリーズで取り上げていきたいと思えます。どうぞご期待ください。

本展開催にあたり、ご協力をいただきました実践女子大学、女子栄養大学、津田塾大学、東京女子医科大学、日本女子体育大学の皆様方に深く感謝いたします。

平成20年10月

独立行政法人 国立女性教育会館

理 事 長 神 田 道 子

女性の高等教育の黎明と5人の女性創設者

私学創設による女性の高等教育の拡大

明治33(1900)年9月、津田梅子によって女子英学塾が、同年12月には吉岡彌生による東京女医学校、翌年4月には成瀬仁蔵による日本女子大学校が相次いで創設されました。前年、明治32(1899)年の高等女学校令によって、公立高等女学校の最低各県1校設置が決まり、ようやく国家によって女子の中等教育が推進されることになりましたが、男子とは教育内容・レベルなどの面で明らかに差がありました。しかも、女性の高等教育については無用論や時期尚早論が大勢を占め、在野で女性の高等教育機関を創設するのは極めて困難でした。しかしながら、これら3校の創設は女性の高等教育への刺激となり、明治36(1903)年の専門学校令公布以降、専門学校として認可を受ける女性の教育機関も徐々に増加していきます。官立や公立の高等教育機関が少なく、その卒業生数も少なかったことを考えると、私立の女子専門学校が女性の高等教育に果たした役割は大きいといえるでしょう。

5人の女性創設者たちの肖像

育った家庭・家族

今回取り上げた5人の女性を含めて専門学校の創設者たちが育ったのは旧士族の家庭が多く、父親の職業は官吏、学者、医者、歌人、警察官と多様です。父親はいわゆる進歩的な思想の持ち主が多く、娘を良妻賢母の枠にとどめることなく、その才能を伸ばすために積極的に支援しました。当時、都市部の家庭では父親は仕事に専念し、母親が家庭内の役割を担う、いわゆる性別役割分業が徐々に広がりつつありましたが、創設者の父親たちは娘の教育に深く関わり、強い影響を与えています。

受けた教育と職業訓練

創設者たちの中には幼い時から学問を好み、才能を発揮した者も少なくありません。家庭での教育、個人教授や私塾、女子師範学校、女子高等師範学校、女子専門学校、欧米のカレッジなど、形態はさまざまですが、当時女性が受けられる最高の教育機会を得ています。それに加えて、本人の研究意欲と努力・研鑽によって優れた成果をあげ、実力を身につけたと思われます。また、創設者たちには学校創設前に教員として女学校や女子高等師範学校などで教えた経験をもつ者が多く、女子教育や社会的活動などで高い社会的地位を得ていました。しかし、それだけに満足せず、それぞれが理想とする女性の高等教育の場を実現しようとしたのです。

高等教育機関創設の目的

初期の女子高等教育機関の主な目的は、専門的職業教育と高度な一般教養教育に二分されますが、どちらも最終的に女性の自立を目指したものと思われます。女性創設者たちにとって、当時の隷属的で、自活の道もない女性たちの自立が重要な課題であったからです。創設された高等教育機関では、今日なお女性の人間性・自立性を尊重した人間教育が重視されているのはそのためと考えられます。

年表

1854 ●下田歌子 生 まれる		1853 ペリー浦賀に来航
		1858 日米修好通商条約
1864 ●津田梅子 生 まれる	下田歌子	1868 明治維新
1871 ●吉岡彌生 生 まれる 1871 ●津田梅子 岩倉使節団 に随行して渡米 1872 ●下田歌子 宮中 に出仕	津田梅子	1871 廃藩置県 、文部省設置 1872 学制公布 1875 東京女子師範学校校開設 1879 学制廃止 、教育令公布
1879 ●下田歌子 宮中奉仕 を辞す	吉岡彌生	1883 鹿鳴館落成
1880 ●二階堂トクヨ 生まれる 1882 ●津田梅子 帰国 1882 ●下田歌子 桃夭学校開設 1889 ●吉岡彌生 済生学舎入学 1889 ●津田梅子 再度 の米国留学	二階堂トクヨ	1889 大 日本帝国憲法発布
1892 ●吉岡彌生 済生学舎卒業 1892 ●津田梅子 帰国 1893 ●下田歌子 女子教育視察 のため渡欧 1895 ●下田歌子 帰国 1899 ●香川綾 生 まれる 1899 ●下田歌子 実践女学校開設	香川綾	1894 日清戦争 (～95) 1899 高等女学校令 、私立学校令公布
1900 ●二階堂トクヨ 女子高等師範学校入学 1900 ●津田梅子 女子英学塾開設 1900 ●吉岡彌生 東京女医学校開設 1904 ●二階堂トクヨ 女子高等師範学校卒業		1903 専門学校令公布 1904 日露戦争 (～05)
1912 ●二階堂トクヨ 英国留学		
1915 ●二階堂トクヨ 帰国		1918 大学令 、高等学校令公布
1921 ●香川綾 東京女子医学専門学校入学 1922 ●二階堂トクヨ 二階堂体操塾開設 1926 ●香川綾 東京女子医学専門学校卒業 1926 ●二階堂トクヨ 日本女子体育専門学校開設 1929 ●津田梅子 逝去 (64歳)		1923 関東大震災
1933 ●香川綾 家庭食養研究会開設 1935 ●香川綾 『 栄養と料理 』 創刊 1936 ●下田歌子 逝去 (83歳)		1936 二・二六事件 1939 第二次世界大戦勃発
1941 ●二階堂トクヨ 逝去 (60歳)		1941 太平洋戦争 (～45) 1945 ポツダム宣言受諾、終戦
1950 ●吉岡彌生 東京女子医科大学開設		
1959 ●吉岡彌生 逝去 (88歳)		
1961 ●香川綾 女子栄養大学開設		
1997 ●香川綾 逝去 (98歳)		

下田歌子…大衆女子教育の道をひらく

「歌子」の名を賜る

下田歌子(旧名・平尾^{ひら お せき}鉦)は、安政元(1854)年、岐阜県恵那郡岩村に生まれました。平尾家は儒学者の家系であり、聡明な鉦は、家庭での教育によって、漢詩、和歌の才能を開花させました。17歳のとき、父のあとを追って上京した鉦は、推挙によって宮中に出仕し、時の皇后(のちの昭憲皇太后)に和歌の才を愛でられて「歌子」の名を賜り、以来学事に関しては常に陪席を許されるようになりました。

上流女子教育の開始

明治12(1879)年、26歳の歌子は宮中を辞し、翌年、下田猛雄と結婚しますが、猛雄は4年後に病没します。宮中を下った歌子に女子教育の一步を踏み出させたのは、明治の顯官伊藤博文らの要請でした。明治15(1882)年に桃夭学校を設立し、上流子女のための教育を開始します。続いて明治18(1885)年、華族女学校が設立されると学監兼教授に就任、のちに学習院になると女学部長を命ぜられ、教育経営の重責を担いました。

欧米視察・大衆女子教育に目覚める

明治26(1893)年、40歳の歌子は女子教育視察のため欧米に出発します。イギリス女性の労働や母性保護のはげしい討論に圧倒され、日本が世界で肩を並べるには、多数の女性がイギリス婦人同等の力を養わなければ国の発展はないと考えました。こうして、帰国後は、限られた人々ではなく、一般大衆女子の教育に当たろうと決心するに至るのです。

帰国後の明治31(1898)年、歌子は帝国婦人協会を設立し、大衆女子教育に着手しました。「いづれの国においても、国家の背髄はその中等社会である。社会風潮の清濁は、そのみなもと女子にあり」という設立主旨には、歌子の確信がこめられています。「教育、文学、工芸、商業、救恤(慈善)の五部門を置き、夫々に研究会をもち、学びの場と実践の場を与えて、自立、自営の途を立たせる」という事業計画は、当時あまりにも先見的すぎて順調に行かない面もありましたが、大きく発展したのが教育部門でした。その一環として、翌年、帝国婦人協会付属実践女学校および女子工芸学校が設立されます。

下田歌子が目指したもの

歌子は女子が社会に与える感化(インフルエンス)の重要性を説き、「女子教育の必要性をあまねく世人に伝えよ。子供の教育は胎内より始る。ゆりかごを動かす手は世界を動かす」と次世代を育てる責任の自覚を訴えました。さらに「学問は、机上のみならず、実地に用いなければ役立たず」と実践倫理による自立自営を説き、「匂えやしま(八島)のそとまでも」(実践女子学園校歌)と世界的視野で日本婦人の存在と活躍を目指しました。

津田梅子…女子高等教育、英語教育のパイオニア

日本最初の官費女子留学生

津田梅子は、幕末の元治元(1864)年、江戸牛込町に生まれました。

明治4(1871)年、岩倉使節団とともに開拓使から派遣された日本で最初の官費女子留学生の1人として6歳で渡米し、ワシントンの日本弁務使館に勤務するチャールズ・ランマン宅で11年間育まれました。17歳で帰国した際には日本語や日本文化が理解できず逆カルチャーショックに苦しみましたが、帰国前後から、ともに留学をした大山捨松と学校をつくる夢を語り始めています。

華族女学校などで英語教師を勤めていた梅子は、明治22(1889)年、念願だった再度の留学を実現しました。トマス・モーガン(後のノーベル賞受賞者)のもとで生物学を学び、蛙の卵の共同研究を行った梅子は、大学に残って研究をすることも勧められましたが、帰国して日本の女性に官費留学生として自らが得た糧を返すことを選び取りました。

女子英学塾の創設を支えた女性たち

明治33(1900)年、梅子は華族女学校、女子高等師範学校教授を辞し、私塾創設の宿望を果たしました。梅子を、そして女子英学塾の創設を支えた女性たちは、国境を越えて活動を展開した点に顕著な特徴があります。塾創立時に来日し教鞭をとったアリス・ベーコン(大山捨松の留学時代のホスト・シスターでした)。関東大震災後の塾再建のために米国に戻って募金活動に奔走し、40年近くを塾に捧げた、布林マー時代からの盟友アナ・ハーツホン。フィラデルフィアから組織的募金活動を行い太平洋の向こうにある女子英学塾の経営面に協力したメアリ・モリス。梅子の私塾をつくる夢は、広く開かれた視野を持った女性たちによって叶えられていきました。ともに留学をした大山捨松も瓜生繁子も晩年まで女子英学塾を陰に陽に支えました。

all-round womenの理想

梅子が開校式式辞で述べた「完たい婦人即ちall-round womenとなるやうに心掛けねばなりません。」という言葉には、それまで梅子が出会ってきた女性の理想像が表現されています。式辞において、英語で表現されなければならなかった唯一の理念が“all-round women”で、「完たい婦人」という日本語だけでは伝えきれない女性像だったのでしょう。梅子はそのような多様なall-round womenたちに出会い、支えられ、10代からあたためてきた夢を35歳で実現することになったのです。

吉岡彌生…女性医師の養成と女性の社会的地位向上にかけた生涯

日本で27番目の女性医師

吉岡彌生（旧姓・鷺山）は、日本初の女性医師養成機関の創設者です。明治4（1871）年、静岡県の漢方医の家に生まれ、2人の兄が医学校に通うという環境に育ちましたが、彼女自身が医師になることに関しては、父の猛反対を受けました。しかし、彌生は粘り強く医学への希望を説き、2年間だけという条件付きで18歳のときに上京します。

当時は内務省の医術開業試験前期・後期試験に合格すれば誰でも医師になることができましたが、女性医師の数はまだ少ない時代でした。私立医学校・済生学舎に入学した彌生は、少数派である女子生徒が多くの男子生徒から差別を受ける現実、女性が安心して勉強できる環境が必要だと感じました。難関の試験を突破した彌生は日本で27番目の女性医師となり、故郷に戻って父の診療を手伝いますが、ドイツに留学したいと考え、再び上京。東京至誠学院で診療を行う傍ら、ドイツ語を学び始め、院長・吉岡荒太と結婚しました。

東京女医学校の設立

明治33（1900）年、母校の済生学舎が女子学生排斥に踏み切ると、彌生は、今後女性が医師になる道が閉ざされてしまうことを憂慮し、夫・荒太と共に東京女医学校を設立します。創設から8年後には初の後期試験合格者（卒業生）を出し、以後、東京女医学校は、少しずつではありますが確実に女性医師を世に送り出していきました。

専門学校昇格の許可を得る

やがて医術開業試験規則の改正が行われ、国の定めた専門学校の卒業生しか受験できないことになると、専門学校昇格の許可を得るため、彌生は文部省に何度も足を運び、学校や病院の設備を整えようと奔走しました。その甲斐あって、東京女医学校は東京女子医学専門学校へ昇格、のち、文部大臣指定学校となり、卒業生は無試験で医師資格を得られるようになりました。大正11（1922）年に最大の協力者であった夫・荒太を亡くした彌生でしたが、夫の夢でもあった大学への昇格という目標を忘れることはありませんでした。

女性の地位向上のため幅広く活動

彌生は女子医学教育と並行して自らも医師として活躍するだけでなく、講演や著作の執筆など精力的に活動しました。医療の分野に限らず、女性の地位向上や職業に携わる女性の指導など幅広く関わり、数多くの団体の役職にもつきました。国外へも活躍の場を広げ、昭和3（1928）年にはホノルルでの第1回汎太平洋婦人会議へ参加、昭和14（1939）年には厚生省・文部省の嘱託として欧米視察も行っています。こうした精力的な活動とともに大学の発展に尽くし、昭和25（1950）年には念願の大学昇格を実現させました。長年に渡り、日本の女子医学教育につくした彌生は、昭和34（1959）年5月に彼女の志を継ぐ多くの卒業生たちに看取られながら88歳の生涯を閉じました。

二階堂トクヨ…草創期の女子体育を手作りました人

文学少女から体操教員へ

二階堂トクヨは、明治13(1880)年、宮城県に生まれました。小学校卒業後、14歳で分教場の准教員となり、正教員になるために師範学校を目指しましたが、折り悪しくこの年から宮城県師範学校では女子部が廃止、トクヨは隣県の福島県師範学校入学を果たすために、一面識もない福島民報社に手紙を書いて、同社長の養女となりました(のち復籍)。

さらに女子高等師範学校文科に学び、23歳で石川県立高等女学校の教諭となります。学生時代は文学少女で、短歌を好み、将来はその道の専門家になるのではないかとされていました。たまたま最初の赴任先で体操授業を担当させられたことがきっかけとなって、それまで嫌っていた体育に積極的に打ち込むようになり、3年後に高知に転任したときは堂々たる体操教員になっていました。

イギリス留学・新しい体操観への目覚め

30歳で母校の東京女子高等師範学校へ助教授として迎えられたトクヨは、これまでの体操研究の実績を高く評価され、イギリス留学を命ぜられます。「足掛四年」にわたるイギリスでの研修と見聞は、トクヨの体育観を大きく転換させました。

トクヨが学んだキングスフィールド体操専門学校は、イギリス初の組織的な体操教師養成のための全寮制の学校でした。社会のために働く人間の育成に重きを置き、体育の技術だけでなく、広い教養を身につけさせ、体育指導者として社会で立派に活躍できる女性を育成しようとする設立者兼校長マダム・オスタバークの教育方針に、トクヨは深い感銘を受けました。

二階堂体操塾の開校

帰国後のトクヨは、東京女子高等師範学校の教授に昇進して、女子体育指導と教員養成の重責を本格的に担うことになりました。しかし、人間教育の一環として体育を捉えるという、今から考えれば当たり前の構想も、旧弊な人々の間では十分な理解を得られず、ついには大正11(1922)年、財政基盤もほとんどないままに、東京代々木の民家を学校兼寄宿舍として二階堂体操塾を開校します。トクヨの、いわば女子体育自立の運動は、共鳴する人々に支えられ、女性の社会進出の要求・女子専門教育普及の上げ潮にも乗って、二階堂体操塾は、早くも4年後には日本最初の体育専門学校となりました。

体育を中軸に据えた全人教育

トクヨは述べています——身体健康維持・増進を目的とする体育は、知育・徳育の基礎であり、老若男女それぞれの特質・段階に応じて、楽しく、わがものにすべきものである。女性も社会に貢献することによって、宇宙に生み出されたるご恩返しをなし得るのであり、そのためには、まず自己一身の心身の独立を計らなければならない。心身の独立を計るためには「心身の健全」を得なければならない。「生理的機能を完全に、且つ精神的活動を盛ならしむこと」によって「初めて人生の幸福を味わう」ことができる——こうした教育理念は、トクヨの生涯をかけた苦闘の産物でした。

香川綾…栄養学の研究と教育に捧げた生涯

自由闊達な家庭での教育

香川綾(旧姓・横巻)は明治32(1899)年、和歌山県本宮で生まれ、父の自由闊達な教育方針のもと、読書好きのガキ大将として育ちます。15歳で直面した母の死に衝撃を受け、医学を学びたいと考えるようになります。しかし、父の強いすすめから和歌山県立師範学校に進学。卒業後は小学校の教員となりましたが、2年で離職し、医学の道をめざして上京しました。

念願の東京女子医学専門学校へ

22歳で東京女子医学専門学校へ入学。卒業後は、東京帝国大学医学部の島蘭順次郎教授のもとで、脚気研究の補助的仕事をするようになります。綾は島蘭順次郎から「医者の本分は人を病気にならないようにすることである」と教えられました。

当時、日本では脚気が猛威を振るい、それを治すビタミンの研究が盛んに行なわれていました。島蘭教授は食事の問題からビタミンに注目、綾は飯の炊き方の研究課題を与えられ、器具、方法、材料等の科学的研究に取り組みました。当時唯一の栄養食糧雑誌『糧友』に「飯の炊き方」を発表、島蘭教授の代理講演では「主食は胚芽米、魚一、豆一、野菜が四」の食事法を提唱し、入院患者の50倍の数の在宅病人に対する医師の責務として食の改善を唱えました。

31歳のとき、医局の先輩である香川昇三と結婚、人生の師として終生尊敬する出会いとなります。一女三男をもうけ、自らの育児体験を「乳児五回食、幼児四回食」の提案に生かすなど、仕事と家庭を両立させました。

栄養学教育の発展に尽くす

昭和8(1933)年、夫妻は「家庭食養研究会」を開設し、近隣の医師の妻やその子女に「病人をつくらない食生活の改善」を教え始めました。学生が作ったテキストが好評なことから、頒布希望に応えるかたちで、雑誌『栄養と料理』が創刊されました。

昭和12(1937)年、家庭食養研究会は「女子栄養学園」と改称、学校となりました。しかし、太平洋戦争によって食糧事情が悪化、空襲で校舎が焼失、疎開先で夫・昇三が死去と、困難な時代が続きます。「どちらかが一人になっても生き残った者が目的の仕事の続けよう」という夫との誓いどおり、戦後、綾は一人で学園を復活させます。女子栄養大学家政学部食物栄養学科開設にあたっては、栄養学教育の必要性を文部省の担当官に説得するために奔走しました。

また、勘に頼っていた調理を誰でも再現できるものにするために計量カップ・スプーンを考案し、「何をどれだけ食べれば良いのか」を科学的に解明して、食品群の分類を四つに発展させ、「香川式食事法」を完成発表しました。このほか、料理教室や通信教育の開講、栄養クリニックの開設など、生涯、栄養学教育の発展に尽くしました。